

乳幼児の精神発達

——精神分析的な観点から (1~3才)——

小 此 木 啓 吾

一 まえがき

精神分析 (Psycho-analysis) といつても、フロイト (Sigmund Freud 1856—1939) が一九世紀後半に創始して以来、八〇年以上の発達を遂げている。ここでは、現代精神分析——これを自我心理学 (Ego Psychology) ともいう——の観点から乳幼児期 (一才から三才まで) の精神発達について、その要点を述べてみよう。乳幼児の心身の発達一般については、すでに本講座で、くわしく述べられているので、ここでは、それらに対する精神分析的な理解の特徴、というべきものを要約する。

二 精神発達に関する精神分析的な観点

乳幼児の精神発達について、精神分析は、次のような基本的な考えをもっている。

I 精神発達 (mental development) は、脳の成熟 (maturation) によって支配されている……人間の脳は、出生時すでに一人前になっているわけではない。出生してからも——特に五才位までは——ほとんどん成熟して行く。そして精神発達は、この脳の成熟のリズムによって支配されている。従って、子どもの養育、しつけは、このリズムを十分に考慮しなければならない。脳の能力にとって、未だ無理なノルマを課しても、かえって歪みが起ってしまう。成長のリズ

ムとしつけのタイミングが大切である。

II 精神発達には、先天的に定められた脳の成熟のコースと段階に沿った、一定のプログラムに従っている……この脳の成熟は、人間である以上、どの子どもでも——少くとも正常範囲にあれば——すべて、予め定められた先天的なプログラムをもつてくりひろげられる。だから、子どもの精神発達はすべて、ある程度共通したコースをたどり、何才で何、何才で何と共通した段階を経るものである。育児には、このプログラムの適切な理解が、何より大切である。

III 精神発達は、後天的な経験(experience)、学習(learning)、とりわけ、人間関係的交流によって左右される。……先天的な脳の成熟だけで、精神発達が可能になるわけではない。(例えば狼少年の場合) 脳の成熟によって生み出される準備態勢(readiness)を開発して、子どもに精神的な諸機能を身につけさせる役割を果たすものこそ、おとなの養育、しつけである。従って、精神発達は、周囲の環境、とりわけ人間環境から与えられる経験、父母との交流からの学習によって、初めて可能になる。よきしつけ、教育とは、脳の成熟による準備態勢を適切に開発する、時機適切な働きかけである。換言すれば、養育者(特に母親)の働きかけと子どもの成長のリズムが、順調に共鳴し合うところに、子どものよき精神発達の源泉がある。

IV 精神発達は、子どもの内外両面にわたるものであり、その主

体は自我とよばれる……精神発達の主体を、精神分析では自我(ego)とよぶが、その特徴は、精神発達を常に、内外両面について総合する点にある。すなわち、精神発達は、一面からみると、外界の知覚、認識、判断、対人間関係への適応などを掌る対外的精神機能の発達であり、一面からみると、自分の内面、記憶、感情、生理的緊張(欲求)などをコントロールする対内的機能の発達である。精神分析では、前者を、自我の適応機能(adaptation)後者を自我の防衛機能(defence)とよぶ。自我はその両面の機能の主体である。

三 乳幼児期精神発達の特徴

このような精神分析的な観点から、乳幼児期(一才〜三才)をみると、次のような特徴が認められる。

I 脳の成熟はもちろん、身体的な生理的機能全体が未発達で、母親(又は母親代り)に対する依存性が高い。

II 従って、母親と一体の状態から、少しずつ分化し、生理的にも心理的にも母親から分化・独立する方向に向かって成長する途上にある。これを個体化(individuation)という。

III 自我は、対外的に、母親から分化・独立する方向に向うと同時に、対内的に、次第に、精神的なもの、肉体的なもの、心理的なものと生理的なもの、過去と現在、空想と現実、の区別を確立して行く。これを自我境界(ego boundary)の形成という。

IV このような発達と共に、「自分(ego)」という意識と「別の人(他者)」の意識を分化させ、自分と他の人間の間に、信頼、安心、安定感、などを得、安定した人間関係意識を獲得して行く。
へこれをよき対象関係 (good object relation) の確立というへ

四 乳幼児期精神発達の経過

以上の特徴を念頭におきながら、乳幼児の精神発達の経過を概説してみよう。

I 基本的同一化 (primary identification) の段階

出生直後は、乳児は、まだ十分に独立した生理機能を営むことができない。すぐ吐いてしまったり、体温や呼吸が不安定だったりして、外界の変化がすぐに乳児の生理状態に影響してしまう。このように極く早期の段階では、母親が、絶対的な保護者であり、乳児と外界の関係はもっぱら母親が掌る。しかし次第に乳児は、摂食(母乳を吸う)、運動、睡眠、覚醒などのリズムを確立し、外界の変化にもある程度の独立性を保つようになってゆくが、このようなリズムの成立や生理的安定の確立にも、母親が大きな役割を果している。母親の育児態度が、乳児のこの生長そのものに影響をおよぼすのである。

こんな状況では、母親と乳児の情緒的結合 (emotional union)

が、どんなに大きな意義をもつか、明らかであろう。もし母親との

結合によって保護されないなら、乳児は、生存することも健全な生長を営むことも困難である。乳児は、栄養、情緒的やさしき、温かさ、接触、その他の一切を母親から得るのである。

そしてこの段階で、乳児は、自分の生理的安定の根源である母親との結合に対する基本的信頼 (basic trust) と期待によって、安定した生活感情と生理的機能を発達させてゆく。この乳児と母親との一体感の中で、乳児は、未だ自分と母親が、身体的にも、精神的にも別個の存在である、との認識を得ていない。両者は乳児の意識の中では混然一体である。それ故この段階を、(母と子の一体の) 基本的同一化 (primary identification) 段階とよぶ。

この同一化について、注目しなければならない事實は、同一化というと、一方が他方に同化する試みを意味するので、乳児の方が、一方的に母親に同化することを意味するように見えるが、実はそうではない。むしろ相互的同一化または、共生 (symbiosis) とよぶべきである。すなわち、母親もまた子どもを愛し、子どもを必要とするのであって、母親の側も子どもと一体になろうとする強い共感性と欲求にあふれている。もし、当然母親として準備されているはずのこの母性愛が母親に欠如していたり、それを率直な形で子どもと交流することに抵抗 (防衛機制) が働いていたりすると、子どもは、終始、不安感や無力感にさらされることになる。

II 個別化 (individuation) の段階

一方で脳の成熟が進むにつれて、乳児の精神機能も次第に発達し、歩いたり、話したりすることを学ぶにつれて、環境に対する現実的な支配力を拡大し、コトバの習得と共に、前言語的な身体言語の代りに、言語的コミュニケーションを用いるようになる。このようにして、生理的、肉体的にも、心理的精神的にも、母親への依存度が減り、独立した行動が可能になるにつれて、現実的な判断や随意的な支配力が次第に高まってゆく。

このような、現実的行動力、判断力の発達と共に、それまで精神発達の基礎となっていた、自分と母親の結合についても、より現実的な態度がとれるようになってゆく。このようにして精神発達は、母子の基本的な同一化の段階から、母子の分化、あるいは、母からの子どもの分離・個体化 (separation individuation) の段階へと進むのである。

それまでは、混然一体で未分化だった子どもの中の、母親像 (mother-image) と自己像 (self-image) は、次第に分化し、母親から独立した「自分 (self)」の意義が育ち始める。

このような個体化は、基本的な同一化によって得られていた、基本的な信頼感、安定感を基礎にして初めて可能であって、そのような安定性 (security) と連続 (continuity) 性がとり入れられて、安定した自己像が確立されるのである。

ここでもまた、子どもの精神発達と母親側の態度の微妙な相互関

係が重要な意味をもっている。

例えば、すでに肉体的、生理的発達や行動性の増大が子どもに起っているのに、母親の方が、いつまでも、赤ん坊扱いにして、何から何まで、子どもと一体になろうとし、あれこれ世話ばかりやいたり、干渉したり、過保護であれば、子どもは、母親から分化・独立した自己意識を獲得し損ってしまう。いや母親の側に、子どもが、そのような独立した自己像を確立する方向に発達するのを、無意識に抑制し、妨げる傾向が、絶えず働いている場合もまれではない。あれこれ身体の心配ばかりする心氣的な母親 支配的専制的な母親 など。

その反対に、早期の母子一体の段階が、すでに不安定で、愛情と信頼を欠いて、子どもは、一方的に母親に依存しようとするが、母親の側は、終始子どものこの期待を裏切っている場合には、発達段階が、母との分化独立の時期になっているのに、子どもは、母親から分離した安定した自己像も自己信頼も獲得しておらず、ひたすら、母親への依存に執着し、母親が、独立させようとすればするほど、子どもは母親から引き離される不安 (分離不安 (separation anxiety)) に脅かされて、ますます不安になり、母親にしがみつくといった悪循環がくり返される。

このように、母子関係は循環的であって、よき循環が生まれるか、悪循環が生ずるかが、育児の重要なわかれ目である。

Ⅲ 社会的規準の内面化

母子の分化・独立は、子どもの自我の発達を意味するが、同時にそれは、子どもの社会化 (socialization) である。子どもが現実的な行動力や判断力を得るにつれて、子どもは、欲求の直接的な即時の満足を延期し、時には、それを断念する態度を身につけなければならない。このような欲求のコントロールが、社会的な規準にかかった形で学習されるところに、子どもの社会化が成立する。

ところでこの社会化、しつけはもっぱら、母親及び父親を介して与えられる。すなわち、家庭内のしつけによって行なわれる。そして子どもは、これらのしつけを介して与えられる家族内の規準を、自分の内部に内面化して行く。これが精神分析で、超自我 (superego) とよばれるものの先駆である。この超自我は五、六才位になって、初めて完成されるのであるが、三才頃には、すでにその先駆が形成され、超自我形成の基礎づけが行なわれている。

但し、この時期の超自我は、未だ、真に内面化されきったとはいえない。むしろ、外部にある良心 (external conscience) とよばれるように、その規準の模範となる父母が眼前に存在し、実際の力をふるうために、その父母の態度如何によって、子どもに内面化された規準の影響力が大きく変わるからである。例えば折角でき上っていたと思われていたしつけが、父母との情緒関係の如何によって、ガタガタと崩れてしまうのは、しばしば見られるところである。そ

の意味で、現実の両親との関係がどうであろうと、はっきり確立した内面的規準 (超自我) によって、善悪が判断されるようになるには三才以後の教育と精神発達にまたねばならないのである。

しかし、いずれにせよ、このようなしつけの規準は、家庭内で父母を介すとはいえ、同時に、その家庭、父母のおかれる、一般社会、文化、時代の規準のパターンによって影響をうけるのは当然で、乳幼児期といえども、これらの文化パターンに左右されているわけである。

このようなしつけの過程で、父母特に母親の価値規準が、子どもに内面化されるのは、母子の間に人間的な交流が確立しているからにはかならない。換言すればすでにのべたような、母と子の分化・独立と並行して、母子の間により対人関係的交流が保たれ、一方に、賞讃・元気づけ、保護や慰めなどの情緒的交流が存在し、それを背景にして、母親のしつけ、欲求満足の延期や断念が命じられるのである。この際強調すべきことは、母子の間の情緒的交流が豊かで、安定したものであれば、子どもは、直接的な欲求の断念や延期によって、欲求不満を生じても、その不満から生ずる攻撃的感情 (怒りやうっ憤) を、この母親との情緒的交流によって中和することによって、比較的苦痛なしに、それを耐えることができるという事実である。

ところがもし、この母子関係が、不安定で、終始動揺したもので

あれば、しつけをうけた際のフラストレーションや攻撃的感情をやらわらざる道がないために、それはさらに激しい破かい的な言動や感情を誘発するか、ひどい無理をした抑圧や否認の防衛機制によって、その欲求や感情を押えつけねばならなくなる。

しつけの不成功、情緒的に不安定な子ども、神経症的な傾向、心身症的な反応の起り易さ、の背後に、このように不安定な母子関係が見出されることが常であるのも、このためである。

また、このような基本的な信頼と愛情の交流が十分に確立していないままに、きびしいしつけが行なわれたり、過度の甘やかしが与えられると、子どもは、相手(母親)に対して、依存的な態度と独立的な態度、従順な態度と反抗的な態度を、激しく交互に向ける両価的態度(amivalence)を結果する。ある程度の両価的態度は、この年令になれば、当然であるが、それが、基本的な信頼と愛情交流を背景にしたものであるか、健康か神経症的かのわかれ目である。

尚、それ以前の生後一才〜一才半位までは、いわゆる部分的対象関係(partial object relationship)とよばれるように、相手が自分の欲求を満たし、快を与えてくれる時は相手との交流が保たれ、一度相手が、自分の欲求を否定したり、苦痛、不快を与える際には、全く相手との交流は断たれ、攻撃と怒りのみが向く。両価的な母子の対象関係(对人的交流)は、このような部分的対象関係を克服し

た段階で、初めて可能なものであることはいうまでもない。

むすび

以上、乳幼児期(一才〜三才)の精神発達について、精神分析的な自我心理学の立場から、その要点を述べた。

要約すれば精神分析では、あくまで精神発達の基礎に脳の成熟のリズムと発展を考えると共に、それに応じた時機適切な对人的交流(特に母子関係)が、次々に得られて行くところに、母子一体の基本的同一化の段階から、母子の分離・個体化、社会的規準の内面化などを経た健全な自我発達が順調にすすめられてゆくと考える。そしてその間の具体的な母子関係、特に母親の子どもに対する態度が、それぞれの段階で、子どもの精神発達に及ぼす影響をよく理解することによって、適切な育児方針や情緒障害の治療の指針を得ることが可能になる。

(慶応大学医学部神経科)

